
くずみくんのネター覧

久住祐治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くずみくんのネター一覧

【Nコード】

N2207U

【作者名】

久住祐治

【あらすじ】

ここでは、私がぼつと思いついた二次創作のネタを投下していきます。ここから独立して連載が続くかもしれないし、時系列を跳び越えて続きが再びここに投下されるかもしれません。が、とりあえず今はネタ集です。設定は甘甘ですが、それも思い付きゆえです。でご容赦くださいませ。ちなみに、作者は百合好きだということを最初に記しておきます。それと、短いですよ。注：キーワードと原作表記は新たに投下し次第随時追加していきます。

とある魔術の禁書目録 インデックスに憑依（前書き）

インデックス IN 男！

とある魔術の禁書目録 インデックスに憑依

「火織、何してるのさ」

「い、インデックス！？ いえ、別に何も！？」

「……えっちいことでも」

「してません！？」

青々と茂った芝生の上に寝転んでいた黒髪の女性は、びくつとしながらも起き上がりこちらを見る。

その目は驚きつつも温かな光が宿され、私も何気なしに彼女の隣へ寝転んでみた。

「……楽しそうですね。インデックス」

「そうだね、楽しいよ。とっても」

言葉少なく、私は黒髪の女性、火織と手を繋ぐ。そこに確かな暖かさがあることが、なにより嬉しい。一人だった俺を私に変え、ずっと傍にいと誓ってくれた大切な友達だから。

私の名はインデックス。正式名称『Index-Librorum-Prohibitorium』、魔法名は『Retaliare 092』《対するモノへ報復を》。あらゆるものは私の道を阻むことを許しはしないという誓いの名だ。

で、この名を聞いて多分疑問に思った人が大多数だと思う。インデックスの魔法名は『dedicatus545』じゃないのかとか、お前誰だよとか。その疑問に答えよう。

私は、学校に突っ込んできた車に引かれて死んだと思いきや、何故かインデックスとして転生していた。うん、何言ってるんだコイツ的な生暖かい視線を向けるな。本当のことなんだから。

一番の壁は性別だったなあ……。私、前男だったし。今も半分以

上男残ってるし。トイレとか裸とかはもう慣れたけどね！ 私ツルリンペッタンストーンツ！ だし。へへん、悲しくなんかないもの。お胸様のある感覚も楽しんでみたかったとか思ってたないもの！ ぐすん。

それはともかく、そんな感じで禁書目録始めました。『首輪』付けられそうになったけど、自分で解除したよ？ 余裕でございます。原作のインデックスだと他人を疑うことを知らないから、簡単に『首輪』も付けられてしまったけども、私には意味がない。いや、個人的には魔術使えるってことの方がすごいんだけど。どうやら私の精神は一度死んだことで妙に強化されてしまったらしく、宗教色の薄い元日本人マインドでも魔術を使うのに何の支障もなかった。このへんはご都合主義なんだろうか。

あ、それとも魔導書の記憶しまくったおかげで精神が鍛えられたのか。まあどっちでもいいか。

「とりあえず、協力要請の出るところはこれで全部かな」

「そうですね。そう言えば、最高主教から呼び出しが来ていましたよ」

「ローラちゃんか？ ふーん、オツケーオツケー。じゃあとりあえず行ってみよつか」

我ながら軽いと思うけども、これが私だから仕方ない。仕方がないということ、誰か火織の垂れた顔を何とかしておくれ。可愛くってしょうがないのだけでも、他の人にこれ見られると思うと、ちよっとアレだ、複雑な心境という奴だ。

ゴロゴロしていたマイボディを起こすと、火織と一緒に空港までを歩いていった。

さて、歩いている間に今の私の立ち位置なんかも紹介しておこう。今の私は『^{ネセサリウス}必要悪の教会』所属の魔術師であり、非公式ながらも魔神に属している。イギリス清教所属とはいえ、その程度は鎖にも

楔にもならない。何しろ、インデックスの中身はもう精神年齢30
ちよいのおっさんである。乙女な部分ももちろんあるのですけども、
どっちかつーと女の子の方が好きです、はい。

男を好きになるのは、無理かなあ……。うん、無理。

まあそれはともかく、私が魔術師やってないといけない理由とか
は別にないだよね。ローラでも私に首輪付けられんし。ほら、私
純真無垢じゃねーし。

そんなこんなで用意されていた超音速旅客機へと乗り込むことに
ねえねえローラちゃん、てめえ私が一四歳のか弱き女の子であり
けることを忘れてるじゃん？ いや、『歩く教会』があるから別
に問題はないわけですが。火織ちゃんは聖人だし。

「……火織？」

「何ですか？」

「これちよつと速くない!？」

「話せる余裕があるだけマシでは？」

うふふ、そういうことじゃねーでしょう。と思ったけど頑張る。
結構凄いGの中、ほんの十数分でイギリス本土へ到着。速いね、超
音速旅客機。

もう喋る気力もなくなりつつあったので、のろのろとローラのい
る部屋へ入る。火織とは途中で分かれました。

「はろー、何か用なの？ ローラ」

「私にそんな軽い口調で話しかけたるのはあなただけよ、Inde
x-Librorum-Prohibitorum」

「長い!」

「……インデックス、何故に私に抱きつきているのかしら？」

「いや、ほら流れるに？ ローラあったかいし。おっぱいおっき
いじゃん」

げんなりした顔で、ローラがこちらを見る。むう、せっかく大きなおっぱいを堪能しているというのに。なんなのだ全く。

「一応、仕事を頼みしたためにとあなたを呼びつけたのに……。どうしてそう欲望に愚直なのかしら？」

「それが私だからね。それで、仕事って？」

「学園都市の方で奇怪な動きが見られけるのよ。あなたにはその監視と、とある霊装の奪取に赴いてもらいたいの」

「どんな霊装？」

「名はダインスレイヴ。中身は分かりけるわね？」

「うん。出展は北欧神話、『スノッリのエツダ』の中の『詩語法』。ヘグニが所持し、ドヴォルグが鍛えた魔剣だね？ 霊装としての機能は普段は鞘によって抑えられているけど、抜き放った者が望む生命体を必ず殺し、その返り血を全て吸い取る。けど、あれは制御がとんでもなく難しいはずだよ？ それこそ、聖人や私のような魔神じゃなければ」

ダインスレイヴ、それは魔剣としては最高峰に位置する霊装である。

伝承では『抜き放てば最後、血を吸うまでは鞘に収まらず、振った刃は決して外れず、その傷は決して癒えない』という物騒な代物である。まあ、見たら死ぬレベルじゃないだけマシって奴だけども。

けど、霊装としてのそれはとても燃費の悪い破壊兵器であり、並みの術者であれば一瞬で生命力まで吸い尽くされて死亡する上に、制御自体が恐ろしく難しいらしい。

「けど、それを誰が？」

「わかりかねるわ。けれど、これを放っておけば面倒なことになり

けるのは確定、可能であれば破壊して欲しきというのが、今回の仕事よ」

「別にいいけど。ステイルと火織を連れて行くけどさ、上に話は通じてるの？」

「そちらは問題なきことよ。ただ、出来るだけ穏便に、且つ迅速に遂行してもらいたいのよ」

相変わらずローラの喋り方、バカっぽくて可愛いなあ。だから教えないんだけど。

つと、学園都市の方での奇怪な動きとやらも聞いておかないといけないかな。

「で、奇怪な動きって言うのは何？」

「ダインスレイヴを手に学園都市に潜入せし魔術師達が、能力者を使い何かを目論んでいるのよ。その監視を」

「要するに目障りな羽虫を叩き潰せ、手段は問わないってことでしょ？」

「まあ、そういうことになりけるわね。けれどインデックス、あなた少しは言葉を飾るということを楽しみてはどう？」

「別に、意味が通じればいいでしょ？ 出来るだけ被害は抑えて、最速のタイムを叩き出す。それでオーケーね」

私の言葉に、ローラは静かに頷く。まあ、このようなところか。

そして私は学園都市へと赴くことになった。全ての歯車が、回り始める音がした。

キャラ紹介

インデックス Index-Librorum-Prohibit
orum 魔法名『Retaliare 092』《対するモノへ報
復を》

男性が転生した先。とあ禁は全て読破済みのため、自身に優位な地位を形成するためにあらゆる手を尽くした。

その結果『首輪』はなく、『自動書記』ヨハネのペンも自分の意思で併用できる上、スペックを存分に発揮した『魔神』となる。

が、本人はいたって温厚であり、仕事以外では面倒ごとを忌み嫌う。原作では仲違いをしてしまっていた神埼火織、ステイル、マグヌスなどの友人とも記憶があるため友好的な関係を続けており、最大主教と面と向かって話が出来、茶化すことまで出来る図太い人。

一応自分の派閥的なものを作ろうかと画策してもいるが、趣味の範疇である。

趣味はネタ魔術作り。

とある魔術の禁書目録 インデックスに憑依（後書き）

誰も『インデックスに憑依』をやってない気がしたのでやってみた。
最強憑依モノですね、ええ。『インデックスTRUEEEEE!』が
したいだけ。

魔神と神浄とか、マジキチタッグの完成ですよ。

あらずじとしては、このあと学園都市でダーインスレイヴ破壊と魔
術師の殲滅に上条さんが巻き込まれ、交流開始みたいな。

戦闘になると高笑いしながら『ドラゴンプレス竜王の殺息』ぶっ放すような人です
が。

初めての草案投稿、こんなはどう？ とかこここつちにした方がよ
くね？ などのご意見などお待ちしております。もちろん感想もね！
続き催促されるようなことがあれば、余裕があるときに書けるかも
？

ネギま×「C」（前書き）

思いついたのでちょっと投稿。

「C」は先日までノイタミナで放送されていたアニメです。用語などはWikipediaで解説されているので、そちらにどうぞ。

ネギま×「C」

——あなたの未来の可能性を担保に、お金をお貸しします。そのお金を、あなたの才覚で運用してみませんか？

私には、世界がなかった。

常に世界から拒絶され、辿り着いたそこは、自身の才覚と人脈、あらゆる手があらゆる結果を返してくる世界。

金融街と呼ばれる、異世界だった。

「これで、70億」

未来を担保に発行されるミダスマネー。そして、それを奪いあい戦うのがこの金融街。そこに年齢は関係ない、ただ金をどう使うか

だけが問われる。

手にしているミダスカードはプラチナ。下から数えて3番目、ダイクネスにはまだ及ばないけれど、それでも着々と近づいている。未来を買い戻す必要は、私には存在しない。賭けて、奪って、そして生きる。それだけだ。

ミダスカードを懷に仕舞い込むと、音も立てずに立ち上がる。今日のディールはついさっき終わってしまったから、もうここに用はない。

ディールとは、この金融街で行われる取引のこと。ミダスマネーを運用する者たち、アントレ同士が戦い、その勝敗によって敗者の損失分を勝者へと受け渡すのだ。

その場からさっさと立ち去ると、そのまま近くのビルへ入る。私たちが根城にしている場所へと。

「ただいま」

「おかえりなさい、アリス。また勝ったみたいね」

中では、穏やかな笑みを浮かべた金色の髪の女性が紅茶を口に運んでいた。

身に纏うドレスは彼女の雰囲気そのものようで、私はゆっくりと彼女の豊満な胸元に顔をうずめる。柔らかい匂いがした。

「初心者だったから」

「手加減したの？ アリスは優しいのね」

「そんなこと、ない」

残酷なだけだ。

途中で言葉を止め、生の温もりを実感する。私は一人ではない。ここには私だけの世界がある。

私はただのアリスで、マッドハッターはただのハッターで。そう

してここで生きていけるのであれば、狂っていてもいいのだと、私は思った。

この町で一度でも負けを実感した者達は、その後二種類に変わっていく。

一つは、その負けを研究し、次へ繋げようとする者。

そしてもう一つは、その負けに囚われて破産への道を歩み始める者。

私が戦ってきた者達の大半は、皆負けに囚われた。愚かにも。

「そろそろ戻る」

「そう。今度また遊びましょうね」

「うん。バイバイ、レイン」

「ええ、さようなら」

金融街での私の『家族』に別れを告げ、私はその場から立ち去った。

「——ただいま」

金融街から現実世界へ戻ってきた私を出迎えてくれる家族はいない。

ここはウェールズの片田舎、秘匿された魔法使いの町。そして、刺々しい地獄の鳥籠。

『アリス、今日のご飯はどうするの？』

「いい。向こうで食べたし」

『そっか』

カードの向こう側にいる私のアセット『マッドハッター』へそう返し、粗末なベッドへ身を投げる。

アリス・スプリングフィールド、9歳。それが私の名と歳だ。大人びているというなら、それは本物の大人のせいなんだろう。

私達の父親は英雄様なんだそう。そのせいで住んでいた村は襲撃され、友達は皆石にされた。双子の兄は潤沢な魔力と才能で父親を探すと張り切っていて、従姉も何も言わない。恩知らずの愚か者。対して私に魔法の才能はまるでなし。父親を探すつもりも毛頭ない。そのおかげで、私はおちこぼれと呼ばれている。

だが、私の目的はそれじゃない。向こうで稼いだ金は最低限の生活費と社会勉強料など等、これからに必要な金額を除いて預金してある。村の人たちの石化を直すために、必要な金を。

——金は、金だ。その先にあるモノを手に入れるためのものだ。

そして、物語は極東金融街へと移り変わる。

——金のために金を使って、未来まですり減らす気分はどうですか？

キャラ説明

アリス・スプリングフィールド

ネギの双子の妹。悪魔襲撃事件の後『真坂木』によって金融街に入りアントレプレナー『アントレ』となった。

原作開始時点での総資産は約70億ミダスマネー。

現実世界ではおちこぼれの才能なし魔法使いだが、金融街では若干9歳にして最強のアントレの一角として名を馳せている。

アセットである『マッドハッター』と仲間のアントレにだけ心を許し、恐ろしく大人びている。

無理やり魔法学校を卒業させられ、麻帆良へと送られる。そして……？

マッドハッター

アリスのアセット。白いハンチングを枝分かれした二本の鹿の角の片一方が貫通している。

美しい青色の髪が長く伸び、ロリータファッションに身を包んでいる。

メゾ以上のフレイションを発動させるときには髪の色が深くなり黒くなったように見える。

ネギま×「C」（後書き）

麻帆良でもディールはやります。あと現実世界でのマネーゲームなんかも。

うーん、頭使わないと書けなさそうだ。

というか「C」を見ていた人がどれくらいいるんだろうか。

ネギま ネットゲ廃人が行く！（前書き）

題名は仮のものです。

ネギま ネットゲ廃人が行く！

「ルシエル」<ムイ狩り行く？

「ちづ」<あ、クエで尖った枝20いるから、そっち行っていていい？

「ルシエル」<おk、ちよっちホームいてきまつ

「ちづ」<ういー

「尖った枝かー、そしたらあっちかな」

ぼやきながら場所を移動して、カチカチと収納BOXの中からアイテムを取り出して元の場所へ。

うん、やっぱり自作PCだとスイスイだね。20万掛けただけあつてラグることがない。

グラボはやっぱりいいもの選ぶべきだよ。ゲームする人は特に。

「ルシエル」<戻ったお

「ちづ」<おかー^^何してたの？

「ルシエル」<プレゼントー。トレ窓開けてー？

「ちづ」<ういー

こちらのディスプレイにトレード用のウィンドウが開く。

そこへアイテムインベントリにあつた尖った枝をぽいっちょよ。

「ちづ」<くん、いいの？

「ルシエル」<いいいいいよ、嫁の頼みだもんww

「ちづ」<嫁つてwwwそうだけどww

「ルシエル」<あーあ、オフ会したいなー……

「ちづ」<「ルシエル」はイギリスだっけ？

「ルシエル」<うm。PC組むのに貯金はいったからお金ないのo

r z

「ちう」<うあー、ドマイw

「ルシエル」<むー、お金溜まったら日本でオフ会ね！

「ちう」<なら家泊まれば？ 寮だけど1人部屋だし

「うあー、1人部屋かあー。私と一緒にじゃないですか、「ちう」たん」

んふふー、やっぱり「ちう」たんは可愛いよ。

あ、自己紹介がまだだったね。HN・「ルシエル」こと、アリシア・スプリングフィールドです。

今は裏ルートで色々やりながら1人暮らし中。

兄であるネギは、離れのログハウスで1人で住んでいるらしい。

私には関係ないけどね。

「ルシエル」<うん、じゃあ行つたときはお邪魔させてもらいます！

「ちう」<おう、こい！ww

「ルシエル」<にやははww あ、ちよつとお水」

「ちう」<了解w

「ふんふんふん、お水は一杯分、つと」

自分でも意味不明なことを口ずさみながら、冷蔵庫に入れておいたミネラルウォーターをラッパ飲み。

1人暮らしの女の人だったらこれくらいするよね？ え、しない？ まあそんなことはいいや。というか一杯分じゃないし。

そうそう、この「ちう」たんって言うのは私の嫁、もといこのネトゲ内で知り合った子。

おんなじ女性であることは普通のトークと2年位前にやった暴露

大会でわかってるけど、つい結婚を申し込んでしまった。

結婚と言っても、ネットゲ内でのシステムでそうなっているだけで、実際に愛し合っているわけじゃない。

だけど、まあ私の繋がりが一番強いのは「ちう」たんだろうなあ

……。

「ちう」たんになら私をもらってほしいね！ あ、オフ会した後
だけ。

キャスター付きの椅子に座り直し、ヘッドフォンを再度装着して
プレイ再開。

「ルシエル」<おまたへ>

「ちう」<はやっwwもちつとゆっくりでもダイジヨブだったのに
「ルシエル」<嫁を待たすわけにはいかんでしょうjk

「ちう」<リアルだったらそれ言える？

「ルシエル」<言えるよー>「ちう」たん限定だけどw

「ちう」<たんってゆーな！wwにしても、日本語うまくなったよ
ねー

「ルシエル」<そりやもう、日本鯖が一番盛んだったからがながつ
て覚えたのですよ

「ちう」<あー、他の鯖はあんまり交流ないんだっけ

「ルシエル」<そぞ。てか治安悪いし。PKがザラつても嫌なも
んだよ

「ちう」<私も今じゃ最強の一角だけど、昔はPKにびくびくし
てたからね

「ルシエル」<あはは、それは言えてる

同意して、また水を一口。

あ、どうやってお金を稼いでいるか知りたい？ 仕方ないな、教
えてあげましょう。

ま、簡単に言えば裏で情報を求めている人にそれを売りつける、

素敵で無敵な情報屋さん。

怨まれることもあるけど、そこは徹底して情報封鎖してあるから、見つかることはまずない。おかげでがっばり儲けさせて頂きました。私のせいで誰かが死んだとしても、それはそれ、これはこれ。私の生活の糧になってもらったってことで。

「ルシエル」<じゃ次どこ行く？

「ちう」<ごめん、今日これから用事だから、ちょっと落ちるね

「ルシエル」<そかー、仕方ないね。更新楽しみにしてるよ、

「ちう」<wwwうむ、楽しみにしていたまへwwノシ

「ルシエル」<ういー、ハハノシ

そうして、私の目の前にいた極細剣士レイリアマスターが消え去る。

軽装備ながらもその装備の合計額は、オークションで揃えようとすれば優に億は越す超ド級。

何せドロップ率0・001%レアドロップ狙いで3日張ってましたから。むしろ3日でよく出たと自分を褒めたい。

私もかなり高レベル且つレア度の高い装備で固めてる高等魔術師ソーサラーだから、私たちが『結婚』するって言った時には、関係者は全員驚いたらしい。

まあそうだよなー。普通最強格はあんまりそういうシステム使ったりしないし。

メリットの分デメリットも増えるから、ソロで行くって人がほとんどなんだ。

「んー、今日はもう落ちよっかな」

呟いて、システムメニューからゲーム終了を選択する。

「ちう」たんがいなかったら、ちょっとやる気おきないかも。

明日また入ろう。あ、学校の論文も仕上げないとなー。

「なににせよ、平和っていいよね」

これが、出来損ないの魔法使い、アリシアの毎日。

このときはまだ、彼女と早々に出会うことになろうとは思っても見なかった。

アリシア・スプリングフィールド

おちこぼれの魔法使いであり、ネギの双子の妹。双子の妹って設定使いやすいから困る。

ネットゲ大好き、楽しんで儲けよう、向かってくるなら皆殺しがモットーの素敵で無敵な情報屋さん。

体術は一流レベルを超えているが、魔力がないため魔法学校ではおちこぼれ。頭はいい。

お金のこととなると損得勘定のレベルが高くなる。原作開始まではウェールズでアパートを借りて一人暮らししつつネットゲ日和。

容姿は金色の長い髪に青と翠のオッドアイ。

「ちう」

アリシアのネットゲでの嫁。

その正体は皆知ってるネットアイドルちうちうであり、長谷川千雨。

現在彼女が最も心を許せるのもアリシアである。麻帆良が異常すぎるだけで。

ネギま ネットゲ廃人が行く！（後書き）

オリ主でだらだら生きることを目的にした、なんともいえない作品。
読み返すと意外と面白かったのでうpしました。

続きはどうなるか分かりませんが、ストックだけはありんす。
書いてみただけのものが。

ちうちうとアリシアのいちやつきっぷりを見たい方はどうぞ。

「C」とのクロスは見てくれた人少ないのかにえ。

「C」、見てない人は原作アニメ見たほうがいいです。ものっそい
面白いから。と布教してみる。

インフィニット・ストラトス[×]天元突破グレンラガン（前書き）

思い立ったら書くしかない。

グレンラガンのネタを盛り込んだ、インフィニット・ストラトス、オリ主再構成ものです。

インフィニット・ストラトス×天元突破グレンラガン

インフィニット・ストラトス。

それは、一人の女性科学者によって開発された、夢の結晶。

世界はそれを『兵器』として扱い、やがて軍事力はISの保有数によって決まるようになっていった。

既存の兵器を大きく上回る攻撃性と防御性を持ちながら、戦闘機を足元にも及ばせない機動性を併せ持つそれには、欠陥があった。女性にしか扱えないという欠陥が。

かくして、ISの登場から十年が経った今、世界は極度の女尊男卑に傾いていた。

これは、その世界の中で己の意地と浪漫を貫き通さんとした一人の少年と、その意思に賛同し共に進んだ少女達の物語である。

国立、IS学園。

女しかない場所のそこに、俺はいた。

「カーツ、バカでけえ建物だなおい。お役人様ってのはもうちつと啖呵切るうとは思わんのかね。せつかく戦力が集中してたつてのに」

IS学園は日本国が維持費その他諸々の費用を出している学園だ。世界各国からの圧力が大きかったのか、うちが金を出している学

校で出た成果は世界中に公表しなければならぬらしい。頑張れよお役人。何のための外交だ。

ともかく、いちいちそんなことを言っているだけでも始まらないので、とつと先に進むことにする。

「えーっと、教室はこつちだったよな」

俺の教室は一年一組。うん、ここだな。

しかし、周囲の女子生徒からの『何で男がここにいるの？ 不審者？』みたいな目線はどうにかならんかね。うつとおしくてしょうがないんだが。

とりあえず教室の中に入ってみると、これまた冷たい視線が。いや、いいじゃねえかよ別に。

まずは友人作りからだな。防衛網を張らねば。

「よう、アンタが織斑一夏かい？」

「あ、ああ、あんたは？」

「俺は依傍貫治よりしたかんじつんだ。好きなように呼んでくれよ」

「おう、分かった。俺は織斑一夏だ。一夏って呼んでくれ。よろしくな、貫治」

ふむ、思ったよりも気さくな奴らしいな。

初対面のコンタクトはまあまあ成功って奴か。

しかし、俺よりも居心地が悪そうだな。割り切れてないとか、そんな感じか？

「ま、お互い頑張ろうぜ。世界中探しても、今のところ男でISが使えるのは俺たちだけなんだしな」

「なんか、サッパリしてんだな貫治って」

「使えるんだったら使わせてもらうのが持つ者の権利って奴さ」

初対面ながら、結構話せている。これならばこれからの学園生活も特に支障はないだろう。

さて、ここで改めて自己紹介だ。俺は依傍貫治、ちよいとした事情でISが使える男だ。事情つてのは、まあ追々な。

そんなこんなでSHRと一限目までをなんとかこなした俺だったが。

「疲れた……」

「はやいっ!? まだ一限目ですよ!？」

「こんなもんとつくの昔に履修済みなんだよ……。もうちつと先進でんのかと思ってた……」

「えー……」

俺の席は教卓側から見て右から二番目の列の一番後ろ。目は悪くないから十分見える。というかこの机なんぞ、恐ろしいほど高性能なんだが。

で、ぐだーとした俺に反応してくれたのは、窓際一番後ろ、俺から見て左前の子だった。

髪がふわっとしていて、緑色をしている。というか、どうしてこの学校の女子はレベル高いんだろうか。あれか、ISの起動条件に容姿の良さも含まれてるのか？

「帰って寝たい」

「ダメですよ?」

「おう、いい反応だな」

「え、今のはそういうノリだったんですか!？」

「違うぞ。真面目に帰りたい」

「本気!？」

「いや?」

「どっち!？」

「さーここで問題です、どっちでしょうか!」

「え、ええっと、ええー!？」

おお、この子面白いぞ。ぜんぜん違う方向からの反応が返ってくる。

うんうん、これなら退屈しないで済みそうだ。なんともいい反応だし。

「……なんだか、イメージと違いますね」

「なにが？」

「ちよつと、その、怖そうだったから」

あ、それは多分強面のこの顔面のせいですね、はい。

これのせいで時々歳より上に見られるんだよなあ……。夜の教科書買ったりする時には便利なんだが。ほら、これで私服だと年齢確認とかされないし。今も昔もそれは変わらないですよ。

「まあ、人間中身が肝心だってことじゃねーのかね。ということでは寝ます」

「次、織斑先生の授業ですよ……?」

「それはいかん。殺されてしまう」

「え? いやいや、それはないですよ」

「いいや、やるねっ! あれはそういう人だふあつぶうあ!」

ズドバグオオオオン! みたいな爆音と共に俺の頭が爆ぜた。みたいな幻覚が見えてしまうほどの爆音と激痛が俺の頭を襲った。まさか、この攻撃法は?!

「音もなく後ろに立つたとう!？」

「授業が始まっているというのにべらべら喋りおって、挙句何を言っているか貴様は」

「おおっと、その手に持った出席簿がメキヤメキヤ悲鳴を上げていらつしゃいますがどういうことでしょうか!？」

「あ、あの、お、おおお織斑先生!？」

ズドン、スパァン! と明らかに格差がある音を響かせ、俺と緑の子は思い切り叩かれた。

なぜ俺がズドンで、彼女がスパンなのか。俺もスパンでええやん。思ったけど口には出さないぜ、今の俺は知的なのぜぴゅ!？」

「な、なぜもう一度叩いた!？」

「妙なことを考えていそうだったからな。とつとと前を向けバカタツグ」

「わ、私も入ってるんですかー!？」

「よーし、世界を取るうぜ相棒!」

「えー!? ええー!？」

涙目で困惑する緑の子を放置して、千冬さ、織斑先生は教卓へ戻っていく。

あの、周囲の方々。生暖かい目で見るのやめてくれませんか？

「うう、痛い……」

「まあまあ、いいことあるぜきつと」

「依傍さんのせいじゃないですかあ!」

小声で会話する俺たちをほっぽって、織斑先生の話がずっとどこどこ進んでいく。

えーっと、なんだっけ。クラス代表決めるんだっけ？

「クラス代表か……。面倒だなあ」

「面倒なんですか？」

「当たり前だろ。なんか得があるか？」

「……織斑先生！ 依傍さんを推薦します！」

「なっ、デメエ！？」

「ほう、いいだろう。織斑と依傍、他にいないか？」

あ、こいつ「ふへへやってやったぜ」みたいな顔してやがる。

ほほう、だがしかし。君の思惑は俺がぶち壊す！
げんそう

「はい！ 緑っ子を推薦しまーす！」

「え、ええ、緑っ子って私なんですか！？ 私は夢路碧ゆめじみどりというちゃんとした名前が……。ハッ！」

「うっし、夢路を推薦します！」

「ああ、今のなしです！？ なし、ノーカン！ 私は夢路じゃないですー！？」

「夢路、と。この三人以外にいないか？」

「カウントされたあ……。！」と器用にも座ったままorz状態を取ってみせる夢路。あ、面倒だから碧でいいや。

しかし碧っ子はアホの子なのか？ しかも一タリアクションがないな。とってもいいじくりやすい。

「ま、待ってください！ 納得がいきませんわ！」

「せんわー」

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコツトにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

「ですかー」

「実力からいけば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍し

いからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

「せんわー！ パートツー！」

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

「ですわー。あ、これは初めてだな」

「だ、大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、私にとっては耐えがたい苦痛で――」

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「な……っ！？」

あ、啖呵切った。

ちなみに、さっきからセシリアとやらのパツキンのチャンネーの言葉を一々遮って苛立たせていたのは俺です。ごめんちゃい。あ、ごめ、石投げんなすまんかったから。

……ところで、パツキンとかチャンネーって古いよな。何年前の死語だよ。

しかし一夏め、早速啖呵切ったな。意外と沸点低いのか？ 俺も結構低い方だと自負してるんだが、こういうのは逆に微笑ましく思えるんだよな。ほら、弱い犬ほど良く吠えるって言うじゃないの。

「あつ、あつ、あなたねえ！ 私の祖国を侮辱しますの！？」

いいえ、最初に日本を侮辱したのは貴女です。なんか英文訳みただな。

しかしこの少女の髪型は評価したい。だつてドリルだぜ？ 最高じゃん？ 性格がこういうんじゃないかって「一番じゃなきゃ嫌だ！」みたいな直情型馬鹿だったらよかったんだが。

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたら私の小間使い——いえ、奴隷にしますわよ」

「おお、奴隷とは大きく出たな。その手の人には大人気だぞ。よかったなセシリア。」

ところで、ちよつと俺が蚊帳の外なのはということだろうね。

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？　なににせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですわね！」

「……よし、そろそろ俺でてっぺいかな。セシリア、啖呵切ったってことは、俺とも対戦ってことでいいのか？　そこんとこどうなのよ」

「は、はっ？　あ、ああ、あなた！　なんでさっきから私の話にいちいち茶々入れるんですの！？」

「つい」

「ついって……。依傍さん、昔悪ガキとか言われませんでした？」

「いや？　悪じゃなくて鬼だったぞ？」

「尚悪い！？」

ふむ、やはり碧はいい突込みになるな。ぜひとも全国を目指してもらいたいものだ。

ちふ、織斑先生では突込みが殺人兵器になりかねないし、かと言ってほかにいい突込みが見当たらないので。

「まあいいや、セシリア。俺とも対戦ってことでいいんだな？」

「え、ええ！　あなたもついでに捻り潰して差し上げますわ！」

「ほほう、ほざくねえ。まあいいや、俺はどのぐらい手加減すりやいいんだ？」

「……は？」

「だからよ、どれくらい手加減すりやいいのさ。俺手加減下手なんだよ……。何回校長室に呼び出されたか……」

……凍り付いた教室。いやいや、なんで？

疑問に思っていると、碧がそつと耳打ちしてくる。

「勘違いしてるかもしれないけど……、これってIS同士の戦いのことだよ？」

「おう。だから、それでどれぐらい手加減すりやいいのかと」

「……え、本気！？」

「だからさつきから言ってたんだろ。売られた喧嘩は言い値で買う、それが俺だ」

「……あ、あなたは、わたくしのことを舐めていますの！？」

あれ、怒らせた？

あ、それもそうか。一応「代表候補生（笑）」だもんな。プライドに触ったんだろうか。

あと一夏、ポカンとすんな。お前はIS動かせるだけだろ。

「おーいちーちゃんぐぺゅ！？」

「ひ、ひいつ！？　が、顔面が！？」

「次そう呼んだら裂くぞ。ナニをとは言わないが」

「あ、あい、ずびばせん……」

「生きてるーっ！？」

やつべー、つえーな生身でも。やはり普段では勝てぬか。さすが

ノーマルチート。

とりあえずちーちゃんと呼ぶのはやめておこう。本当に裂かれかねない。潰すじゃなくて裂くってところがコエーよね。

「気を取り直して。織斑先生、俺どれくらい必要？」

「一本だ」

「ふむ、オーケーオーケー。当日までには間に合うだろうし、大丈夫だな」

「何が大丈夫なのか分からないけど顔面治ってるからもういいです」

あつ、とうとう碧ちゃんが考えることをやめたぞ！ どうしよう！
ま、別にいいか。

「今凄く私ないがしろにされた気がする」

「H A H A H A、きのせいさ！」

「ウツドスピリット」

「それは木の精」

やはり碧はこのクラス一の突っ込みの才覚を持っているかもしれない。これを野放しにしておくのは惜しいな……。

あれか、突っ込みの出来るIS操縦者として売り出すのか？

「……はあ。とにかく話しは纏まったようだな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。総当り戦を行うので各自準備は万端にしておくように。それでは授業を始める！」

時は移ろい一週間後の月曜日。

一夏と同室になったり碧の動きを見てやったり知り合いの恋路を助けてみたりと動いていたが、とうとうこの日が来た。

『やつぽーかー君！ そっちはどう？』

「まあまあだな。俺が燃えるような強い奴はちーちゃんくらいだねえ」

『まあ仕方ないね！ それより専用ISの調整終わったから、そっちに転送するね！』

「おう」

モニターの向こうのウサ耳付き不思議のアリスがガシャガシャと動き、何かのスイッチを押す。

すると、俺の目の前が螺旋状に渦を巻き、その中心から小さなドリルが出て来た。

「バッチリだ。相変わらずいい腕だな」

『そりゃあ束さんだからね！ それで、また喧嘩？』

「ああ。相方がいないのがちとアレだが、まあ適当に叩き潰すさ」

『頑張つてねー！ そのうちりんちゃんの追加パッチも作るからさ！』

「いいねえ、派手に頼むぜ！」

『モチのロンロン！ ほいじゃねー！』

モニターが消え、後には俺の出番が残る。

一夏は既にセシリアと碧との戦闘を終えているから、一回休んでその間に俺がセシリアとやるということになっている。

さて、喧嘩の始まりだ。

「おい、ISを起動しないのか？」

「それは向こうにいつてのお楽しみって奴だろ？ いいよな、織斑先生？」

「ふん、好きにしろ。そろそろ時間だ」

箒が疑問を言葉にすると、それに答えた俺の声を織斑先生が一蹴する。

それを最後に、俺は一気にピットから跳び出す。到着したそこには、既に青いISが待機していた。

「……あなた、何のつもりですか？ ISを起動させずにやってくるなんて」

「チツとばかり準備が要るんだよ。まあ、気にすんなや。始めようぜ！ 安心しなよ、絶対防御は生きてっから」

「……舐められた、物ですわねッ！」

チュン！ と音速に近い弾丸がさっきまで俺がいた場所を抉る。なるほど、遠距離タイプってのはこういう戦い方が専門だったな。まあ、大抵近づかれるかそれ以上の火力で攻められて落ちるんだが、一本の日本刀を武装として呼び出すと、それで撃ちだされた弾丸を切り裂き進んでいく。

「なっ！？ 弾丸を刀で？！ なんてばかげてますの！」

「オラオラア！ ビビってんじゃねえぞオ！」

喚かれても困る。これが俺だからな。

さて、派手に行こうぜエ！

キャラ紹介

依傍よりはた 貫治かんじ

オリ主であって転生者ではない、男のIS操縦者。

武装は日本刀とドリルの二つだけであるが、その戦闘力は千冬と
同格。

人をおちよくるのが趣味だが、学園に入学してからは碧の反応が
面白いのでしょっちゅう弄っている。

大事な場面で口上を述べ、情に厚く義理堅い。そして何より破天
荒。

学園に入る前は束と共に行動しており、その縁で箒とも知り合い。
その関係で頑張ったため、束と箒の仲は原作よりずっといい。

また、毎日六時間はISに触れていたため、原作開始時点で起動
時間は一年を越えている。セシリアは約一二日半のため、約二九倍
凰鈴音が妹分で、合体なんかもできたり。もちろんISの話です、
決して肉体的な意味ではありません。

夢路 碧 ゆめじ みどり

原作の窓際列、ラウラの横列の一つ前に座っている、緑色のふわ
つとした髪少女。

依傍の破天荒な姿に度々突っ込むも、毎回それ以上のボケで返さ
れる突っ込み少女。

ヒロイン、になるかもしれない。一番ヒロインにしやすいポジシ
ョンの子その一。

専用ISは今のところなし。考えてないだけです。

ファン
凰 鈴音 リンイン

一番オリ主に影響を受けた少女。

本来ならば両親が離婚し、母と共に中国へ行っているはずだった
のだが、それにキレた依傍が鈴の自宅を襲撃、しっかりと話し合わ
せて解決した。ご都合主義とも言うが、そんなものは道理を蹴っ飛
ばしてどうとでもなるのである。

かくしてこの話の鈴は依傍を「おにい」と呼び慕う可愛い子に。
ただし熱血。

一夏とも友人だが、依傍は彼のことを妹分の仲のいい友達としか知らなかったため、すっかり忘れている。

IS 起動時間は依傍に次いで長い七〇〇時間弱。東と依傍と共に世界を巡り、中華の腕を磨きつつISの腕を上達させていった。ちなみに、転入ではなく入学時期が遅れているだけで正規の入学である。

世代不明機 《ラゼンガン》

依傍と共に成長してきた、依傍のIS。待機状態は小さなドリルで、ドリルの部分が金色。

エネルギー源は元々既存のISと同じモノだったが、現在では半分ほど依傍の持つ『螺旋力』へと切り替わっている。

全てのISの基礎理論をぶち壊し、どれほど無茶な変形もこなし、質量保存の法則に風穴を開ける存在。

赤と黒のカラーリングで、全身を覆う形をしているため部品が滅茶苦茶多い。

本来は部品が破壊されれば代用品を使うしかないが、ラゼンガンは螺旋力を物質化してそれを補充する。チート。

武装は《ラゼンガンドリル》と近接刀剣武器《螺旋・一刀》の二種類のみ。遠距離武装なし。

決め技は《メガドリルブレイク》。螺旋力でラゼンガンドリルを巨大化、相手をねじ切る。ただそれだけ。

某螺旋王と同名だが立場的には合体の下ポジション。

世代不明機 《紅蓮・甲龍》 ぐれん しえんろん

《ラゼンガン》と対になるように進化した鈴のIS。待機状態は

ドリルの部分が銀色の小さなドリル。

《ラゼンガン》ほどではないがこちらも鈴の『螺旋力』によって動くよう進化しているため、若干チート気味。

カラーリングも《ラゼンガン》と同じ赤と黒で、同じく全身装甲。ただし無骨な《ラゼンガン》と違い流線型の形状を持つものが多い。

武装は《グレンドリル》と衝撃砲である《龍砲》である。

決め技は《ラゼンガン》と同じ《メガドリルブレイク》。

《ラゼンガン》と常識ではありえない合体方法で合体を行える。

超絶合体機 《グレンラガン》

依傍と鈴が量子化し、《ラゼンガン》と《紅蓮・甲龍》が全く違う形に合体した大型ロボット。

束ですら基礎構造一つ解析できないが、唯一分かっているのは『螺旋力』を使っていることだけ。

依傍と鈴が承認すると合体が行われ、二人は内部のコックピットにて体が再構成される。悪影響はなく、再構成したときに肉体の損傷箇所や疲労は螺旋力によって治療されている。

姿はまさにグレンラガンそのもので、武装は《紅蓮・甲龍》の《龍砲》と《ラゼンガン》の《螺旋・一刀》が合体した《ラガンブーメラン》、二つのドリルが量子化し再構成された《グレンラガンドリル》の二つ。

全身どこからでもドリルを作り出すことが出来、動力は螺旋力であるため半永久的に動き続けられる。

決め技は《ギガドリルブレイク》。内容は《ラゼンガン》などの《メガドリルブレイク》と変わらないが、規模は段違いである。

インフィニット・ストラトス×天元突破グレンラガン（後書き）

よう書いたな。本編ほったらかして。

ちなみに、これから更にでかくなりますね。ええ。

つか体を量子化とかこの00かと。でもこれなら合体できるですよ？ 熱い展開書きたかったんです。

あ、でもこれだと合体のパターンのにアクエリオンにも似てるかもいや、大丈夫か。

ところで、ISでガンダムとかはいっぱいあるのに、グレンラガンは何で誰もやらないんだろう。やっぱりあれか、合体がダメなのか。こればかりは書けないのか。

無茶を通して通りを蹴っ飛ばすんだから、そのぐらい大丈夫だって。しかし私はなぜこうして自分を追い込むのか。でも書けたら楽しいな。

今書いてるISものでもドリル出そうかな。胸熱ドリル。

小学生の魂は大剣、厨学生の魂は大鎌、漢の魂はドリル。

インフィニット・ストラトス デュノアの姉（前書き）

デュノア家本妻に娘がいたら、そしてその娘が人脈チートできる転生者だったらと書いてみました。

嘘です。ただシスコン書きたかっただけ。

インフィニット・ストラトス デュノアの姉

「——であるので」

教師の声を悉く透過させながら、色々と物思いに耽る。

皆さんこんにちは、エリユカ・デュノアです。え、誰かつて？

やだなあ、私のことを知らない？ あ、そう。

私は、正史には存在していない『シャルロットの姉』です。IS
学園二年生で、フランスの代表。

「ねえねえエリユちゃん」

「なあに、サラ」

「ひま」

「奇遇ね、私もよ」

サラ、更識楯無のこと。私の親友であり、好きな人の一人でもある。どちらかというところから迫られてるんだけど。

「さぼっちゃおうかなあ？」

「どこかいく？」

「えっちしたいな、エリユちゃんと」

「あら、いつもしてるじゃない」

「なんだか急にしたくなっちゃったのよ」

「ふふ、欲求不満なの？」

隣同士のサラと、周りに漏れないようにこそこそと話す。内容が
とてもアレなのはデフォルトなので慣れること。

しかしこれではいざ聞かれたときにちょっとばかり気まずい雰囲気になる。

『なので個人間秘密通信に変えてみました』

『つまりこれなら存分に言葉攻めされることが出来るわけね!』

『本当にそっちの方にしか頭が働いてないのかしら? この「ピー」』

『ああんっ、もつとっ、もつと言ってっ!』

『「ピー」の癖に「ピー」に「ピー」だなんて、なんて「ピー」な「ピー」なのかしら。そんな「ピー」にはちょっと「ピー」が必要みたいね、この「ピー」』

『アハアアアン!』

うーん、我ながら個人間秘密通信の無駄遣いだとは思っけど、これが日常だから困ってしまう。そしてサラ、自重なさい。

まあ、そんな感じで毎日過ごしてる訳ですよ。

私がこの世界に生れ落ちたのは、今から一六年前。シャルロットが引き取られたのは二年前だから、私が一四歳の頃だ。

それよりも前からデュノア社社長の妻、つまりうちの母親は私の親父が不倫していることを知っていて、私にことあるごとに『あんな男を好きになっではいけません』と言い聞かせてきた。まあ、精神年齢が年齢だから、大人の対応も心得てただけだ。

うちの父親、今は既に縁を切っているけど、アイツはどうしようもないクズだった。母さんを愛しているように見せながら、そのく

せ外で尻尾を振っていて、しかもそれすらも遊びで。欲しかったのは有能な部下といい血筋、そして会社の利益になる人間だけだったんだから。

そんな父の背中と母の言うことを聞いて育ったからか、私はシャルロットを一目見たとき、絶対に守るんだと心に誓っていた。義理の姉妹としてだって、当然のことだったんだけどさ。

本史と違って私という娘がいたからだろうか、母さんは本史のようにシャルロットを口汚く罵ることもなく、むしろ「辛かったでしょう、ごめんなさい、私がしっかりしていれば」とシャルロットを抱きしめていた。

その一方、父は（本当はアレを父親と認めることですら嫌悪感を抱く行為だけでも）シャルロットをデュノア社の広告塔に、私を次代の社長に育て上げようとしていたらしい。

それを知って、私はもう切れた。シャルロットとデュノア社の全ての未来、そして私達家族を守るため、私は母さんや様々な人たちと手を取り合い、父を社長の座から引きずり落とし、私がそこに納まったのだ。

それからは私とシャルロット、母さんの三人家族でデュノア社を回しつつ、全力で第三世代ISの開発に着手していた。私とシャルロット、二人のIS搭乗者がいたからだろうか、もうそろそろ第三世代が出てきてもおかしくなくらいにはデータも溜まっているはずだ。

そんなこんなで、私はこうしてここにいます。エリユカ・デュノア、転生者として。

ちなみに、サラとの出会いも社長の座をぶんどった頃になる。

たまたまフランスに立ち寄っていたサラが力を貸してくれたおかげで、今の私がいるのだ。感謝は絶対に忘れない。

それと、簪ちゃんとも友達だ。家族ぐるみの付き合いだから、もうひとりの妹と言ってもいいかもしれないかな。

「ロツテー！」

「お、お姉ちゃん！ あんまり大声出さないで！」

「簪ちゃん！」

「お、お姉ちゃんってば……」

授業も終わりお昼休み、私とサラは揃ってイモウトニウムを補給するために食堂にやってきていた。

もちろん、愛しの妹に会うためにだ。

少しだけ頬を朱に染めながら、可愛いロツテがそう「きゃーっ」と言った感じで声を上げた。隣にいた簪ちゃんも、サラに対してそんなリアクション。

「ンンッ！」という食堂のお姉さんの咳払いが聞こえたのでさすがに自重しつつ、周囲に迷惑にならない程度に補給に励むことにした。

私とサラはそれぞれロツテと簪ちゃんからイモウトニウムという超物質を補給することによって、一週間飲まず食わずでも最高スペックでの行動が可能になるのだ！ ただし、その直後にきちんと食料と飲料水を補給しないと倒れるけどね！

「むぎゆうー」

「んもうつ、お姉ちゃんったら……」

「いつも大変だね……、ロツテ……」

「簪ちゃんほどじゃないよ……」

「「はあ……」」

おやおや、おやおや？ どうしてそんなに溜め息をついてるの？
あ、溜め息って健康にはいいそうよ？ 不思議な話ね。

「——よしっ、補給完了！」

「こっちも完了！ ありがとね、簪ちゃん！」

「やっとご飯食べられる……」

「お姉ちゃんたち、そろそろ妹離れ、したら……?」

「えっ……、お、お姉ちゃん、嫌い?」

簪ちゃんが言った途端に、ぴくりつ、とサラが泣きそうな顔になる。というより目の端に玉のような涙が浮かんでいる。

サラは誰よりも簪ちゃんに嫌われることを忌避する。それはサラにとっての存在理由の一つでもあるから、その簪ちゃんに嫌われればサラはきつと自分を見失うだろう。

でも大丈夫。サラは大丈夫。だって、簪ちゃんもサラのことを嫌いになつたりはしないんだから。

「違うよ……。お姉ちゃんのこと大好きだから、そう言ってるの」

「ほ、ほんとにつ? ほんとにそうなの?」

「本当だよ」

「ぐすつ、よかった、よかったあ……」

「……このやり取り、結構見てるんだけど」

「いつものことと思って流す技術を身につけましょう」

「はい」

うん、いいお返事です。

ところで、いつもいる織斑君ご一行が見当たらないのはなぜだろう。まあいいか。

「そう言えばお姉ちゃん、来週から始まる学年別トーナメントは誰と出るの?」

「……どうしようか、サラ」

「えっぐつ、……え?」

「来週のトーナメントよ! 私達まだ決めてないじゃないっ!?」

「私は決まってるわよ?」

「は？」

「虚と出るもの」

「……サラ、今日はもうちょっと激しくしましょうか。明日立って歩けないくらいに」

「え、ちょ、まって！？ おねーさんそんなにもたな」

「持たせてあげるわよ、大丈夫。私に身も心も委ねてしまえば、何にも心配要らないから」

「そうじゃなくてー！？」

うふふ、どうしましょうか。むしろどうしてくれましょうか。私組む相手いないのだけど。

ああつ、むしろ今晚が楽しみだわ。生身で人間がどれほど耐えられるのか、きつと楽しい一夜になるでしょうね？

「お姉ちゃん、笑顔が怖いよ」

「あら、心外ね。満面の笑みを浮かべようと尽力しているのに」
「逆に引きつつてるから」

ふむ、本当にどうしましょう。……いいわ、もうどうともなれ、よ。どうせこれじゃあ誰と組んだって一緒。

そんな私の言葉が、とっても嫌な形で肯定されることになるかも知らず、私は溜め息混じりにその日を過ごすのだった。

キャラ紹介

エリユカ・デユノア 女

IS学園二年生にして生徒会長、デユノア社社長、そしてフランス国家代表と滅茶苦茶な肩書きを持つ少女。

文武両道にして千冬級の化け物だが極度のシスコンで、なによりもシャルロットを優先する癖がある。謎物質イモウトニウムによって動く。

優先順位の最上位がシャルロット、次点で会社と家族、楯無と簪が同率。

楯無に対してはひどく淫猥な発言、表現、直接的な接触が多く、それ的な関係ではないかとも噂されるが、本当の関係はいまだ不明。束との面識はないが、風の便りでシスコンと聞いているため、仲良くなれると確信を持っている。

シャルロット・デユノア 女

原作と違い普通に女として入学してくる。

母親が死んでから引き取られたものの、エリユカが生まれているおかげで本妻の方の精神が安定しており、比較的暖かく迎え入れられた。

しかし、父の方は原作通りのクズだったため、我慢し切れなかったエリユカの様々な策謀によって行方知れずになる。その後、本当

の家族としてエリユカ、その母と暮らしている。

策謀を張り巡らせていたときにエリユカと楯無が知り合い、その縁で簪と友人関係になった。

使用ISも変更。

更識 楯無 女

エリユカに続き学園2位の成績、実力を持つ副会長。

普段はえっちなS型だが、エリユカに対しては極度のマゾヒストとなる謎の性質を持つ。

自由人度には磨きがかかっており、エリユカと簪、シャルロットに虚以外には止められる人間がいない。

エリユカに負けず劣らずのシスコンぶり、簪が楯無の生きる理由のようなものにすらなっている。

エリユカと同じく、謎物質イモウトニウムによって動く。

使用ISは原作どおり。

更識 簪 女

エリユカとの縁で悪くなりつつあった楯無との関係が良好になり、幾分か明るくなっている。

ただ、楯無の極度のシスコンぶりにはやや頭を痛めており、何とか妹離れさせられないかと苦心する日々である。

多分一番の常識人、と見せかけたダークホースになるかもしれない。

使用ISはデユノア社と更識の合同製作なので変更。

オリジナルIS

《ミストラル・オルグイユ》

直訳すると『暴風の誇り』。フランス語である。

エリユカのISで、デユノア社が総力を挙げて作り上げた第三世代。

その可能性は無限にあり、最大の特徴は単一多状況対応型武装。パッケージを入れる最低容量以外をたった一つの多機能型武装で埋めている。

この単一多状況対応型武装、名を『グラン・シャリオ』といい、その名からして七つの形態を持っている。形式的には一つの武器であるため、一々コール、オープンの手間がない。

それぞれ『刀剣』、『狙撃銃』、『散弾銃』、『大砲』、『レンチ』、『パイルバンカー』、『ドリル』と、後半部分が意味不明なのだが、エリユカはそれを巧みに使い分け戦う。

ラファール・リヴァイヴとは別の意味の万能型で、遠すぎれば狙撃、少し近づけば大砲、近づきすぎれば散弾銃、刀剣、ドリル、パイルバンカー、レンチの餌食となる。

暴風、荒れ狂う風をイメージし灰色とオレンジの着色で、装甲は比較的厚い。エネルギーは850。

ちなみに、一年かけて今だに最適化の終わらない意味不明な機体。フィッティング速度はあまり出ないものの、そのオールレンジにも程がある攻撃範囲は癖が強い。

《ミストラル・リヴァイヴ》

直訳すると『暴風の再誕』。これもフランス語である。

シャルロットのISであり、エリユカが自ら監修を努めた第三世代。

《ミストラル・オルグイユ》とは真逆で、こちらはラファール・リヴァイヴの発展系ともいえる存在。

拡張領域は通常のラファール・リヴァイヴの約3.5倍の領域があり、シャルロットの高速切替を最大限に活用できるよう設計されている。

武装は定まっておらず、アサルトカノン、パイルバンカー、刀剣、ショットガン、機関銃などなどの、原作でラファール・リヴァイヴ・カスタム？に装備されていたものは標準装備、それ以外に複数の装備が拡張領域に格納されている。

それとは別に装甲各所に軽機関銃がセットされており、これは装甲と同じ扱いのため一々呼び出す必要がなく、手に取るだけで使用可能である。この部分にセットする武装は事前に変更できるが、大きさに限界がある。

カラーリングはカスタム？と同じオレンジ。エネルギーはやや減って720。

《エトワール・アヴニール》

直訳すると『星の未来』、フランス語である。

簪の専用機で、《ミストラル・リヴァイヴ》と同時期に開発されたBT兵器搭載の試作第三世代機。

日本の技術も加わったことで一段と完成度が高まっており、使用方次第では《ミストラル・リヴァイヴ》を圧倒できる。

武装はBT兵器である四機のビット『カトル・セゾン』、二丁拳銃の『ヴィオレット&オルタンシア』、荷電粒子砲の『是我痛』がある。

ただし、簪の処理能力、並列思考の能力のため、ビットを操りながら二丁拳銃で相手を追い詰めるような芸当も行える。

また、『カトル・セゾン』は自機背面に装着されている状態だと機体全体にバリアを張り巡らせるため、生半可な攻撃では敗れない。『是我痛』は相手の攻撃によって発生したあらゆるエネルギーをBTエネルギーへと強制変換、蓄積し放出する機構のため、相手の

攻撃を受ければ受けるほど威力が上がる仕様となっている。

それを十二分に生かすため、また操縦者の安全確保のためにエネルギーは900、装甲も堅くなっている。

インフィニット・ストラトス デュノアの姉（後書き）

ゼーガペインはつい入れなくなっていました。日本との共同開発だし、日本名入れたいなあ、なんて。ペインってフランス語じゃない気がするけど気にしない。

そして主人公武器は三、四割浪漫。レンチはスパロボZのガンレオンから、ドリルは男の浪漫なので標準装備、パイルバンカーも同義。

あ、続きません。

あとえっちい主人公とドM楯無ちゃん、シスコンは書いてて楽しかった。一番好きかもしれない、ぶっ壊れかけてる人とか。

インフィニットストラトス 厨二病クロス！（前書き）

決して厨二病まとめリンクとかに飛ばないように。

精神に多大なダメージを追い、現実復帰できなくなる可能性があります。

インフィニットストラトス 厨二病クロス！

「IS学園に、ですか？」

城の一角、自室にて私は通信回線を開き、何よりも優先すべき主の声を聞いていた。

『そうだ。例の男性IS操縦者の監視に回ってもらいたい』

「とすると、能力者……？」

『可能性はあるだけだが、お前としてもコネはあったほうがいいだろう』

「……そうですね。わかりました、^{マスター}創造主」

『世界の平穏のため、頼んだぞ』

その声と共に回線が閉じ、部屋に静寂が訪れる。ボイスチェンジャー以外の何かによって私達以外には聞き取れない音になっていた。その声が消えると、中世ヨーロッパそのままといった自室からは声がしなくなった。

私は俗に言うお姫様ドレスというあれを脱ぎ捨てると、既に到着していたIS学園の制服を身に纏う。

私服に近い形にやや改造された制服は、私の意識を一国の王女から一人の能力者としてのものに塗り替えていく。

さて、行くでしょう。

私はアイナ・E・カノッサ。EはエリシアルのEだ。

普段はアイナ・エリシアルとして通っているが、実際には後ろにカノッサがつく。まあ、称号のようなものだ。

私が王女であるエリシア国は土地は狭いが穏やかな気候で、人々も文化レベルも他の国よりも優秀だった。ソーラーシステムによる環境問題の改善や労働者の雇用問題の解決、ほかにも様々な、他の先進国で問題となっていたことを悉く解決し、国の未来は明るいと思われていた。

しかしその矢先に隣国との戦争が起こり、国はたちまち疲弊していった。国内の問題や外交によって利益を得、それを更に国内の問題改善につぎ込んでいた私たちには、対抗手段となる武力などほとんどないに等しかったのだ。

第二次世界大戦を、様々な国との取引によってこちらへの被害を奇跡的にほぼゼロに抑えて乗り切ったことが大きかったのだろう。瞬く間に追い込まれた私達に手を差し伸べたのは、創造主率いるカノッサ機関だった。

彼らは元々心の闇、つまり暗黒面の研究を続けており、その過程で戦争状態における人間の精神の推移を調べていたのだという。その結果、戦争は人々の不安や恐怖、そして凶暴性を引き上げることしか出来ないと確信した彼らは、その闇を取り払うためにカノッサ機関の総力を上げて全世界から争いの火種を秘密裏に消していく活動を行っているらしい。

私達は彼らによって戦争による国崩壊の危機から救われた。

私は人の暗黒面が発現した時に発生するという力への対抗手段である、もう一つの力の可能性を見出され、彼らの仲間にならないかと、創造主直々の誘いを受け、それに乗ることにした。

世界から争いを無くす。酷く難しく困難で、それを望まない者もいるような目的だったが、それでも私はそれに掛けたかった。

なにより、自国の彼らを救ってくれたのはカノッサ機関の者たちだったのだ。今度は私が、その役目を負うときだと知った。

少し話がそれたが、それが私がIS学園へとやってきた理由である。もちろん、各国へのコネクションが出来ればこれ以上ない手土産となるだろうことはわかっていたものの、やはりその理由は強かった。

「それにしても、ドレスを着なくて済むというこの開放感はすばらしい……！」

ウツトリと呟いてしまい、慌てて周囲を見渡す。よし、誰もいない。

これで誰かに見られているとすればかなり恥ずかしい。いや、別に恥ずかしくはないが、その人との会話がとても気まづくなる。

それはともかく、私たちの国は立憲君主制だ。つまり、私自身も法に縛られる身であり、父上である王であっても好き勝手は許されない。

まあ、むしろこのご時世に絶対君主制を行っている国のほうが少ないだろうが。いや、確かアラブの方は多くが絶対君主制だったか。まあいいか。

ともかく、私はこうして今IS学園へとやってきている。それも全て、例の男性初のIS操縦者である『織斑一夏』の監視のためだ。確か、篠ノ之束の幼馴染であり、まともに交友を行える数少ない人間だったはず。それならば可能性は高いか。むしろ能力者である確率のほうが低い。

現状、暗黒面の能力に対抗できる力を持っているものは少ない。私を含めても精々六人がいいところだろう。だが、彼らはそれでもこうして世界を守ってきた。私だって選ばれた身、勤めは果たして見せよう。

さて。そんなわけで私はようやく一年一組の教室までやってきて

いた。さすがIS学園、設備が整っている。しかしこれを日本だけで作らせ、成果は諸国へ公開しろ、というのは些か横暴が過ぎるだろう。日本にほとんどメリットがない。

まあ、問題はそれを飲んでしまった当時の外交陣な訳だが。

我々カノッサ機関の間でも、ISはそれなりに評価されている。尤も、私たちが本気でかかれば普通のISは一瞬で破壊できるが、それを行わないために私たちはいるわけで。

ちなみに、私のIS適正はS+。かのブリュンヒルデと同等らしい。

それで、なるほど。あの真ん中にいるのが例の織斑一夏。やはり周囲が女性だけでは緊張もするでしょうね。まあ同情するだけです。

ついで目を引くのは、興味深そうに織斑一夏を眺める視線を持った少女。金色の髪が良く目立つ。私も金色だけど。

確かセシリア・オルコットと言ったか。イギリスの代表候補生、ISは『ブルー・ティアーズ』……、雑魚か。

いや、雑魚って言うじゃないか。みただけど、ぶっちゃけ雑魚ビットとの同時攻撃ができない以上恐れる理由がないし、出来たとしてもビットを出す前に近づいて斬ればそれで終わりだ。シンプルイズベスト。

というか、以前機関の集会で模擬戦を行ったときは、第三位にも勝てなかった。私は六人の中で第五位です。第六位はいないから、同等五位。

第三位で時間軸掌握が基本ってどういうことなんだろうね、ほんと笑っちゃいそう。斬りかかった次の瞬間に泣かされました。一〇〇年分の孤独の感情いっぺんに詰め込まれれば誰だって泣く。私だって泣く。

まあ、そういうわけで。そんなチート連中に比べたらあんなのお遊戯にもなりません。ほんとに、思い出したら涙出てきた。

「アイナ様、何泣いてるんですか」

「……あれ、ナズナ。何でいるの？」

「なんでって、創造主からアイナ様のサポートに回れて伝達され
たんですよ。聞いてませんでした？」

私の席は一番後ろ、教室の後ろの扉の一番近く。その隣にちよこ
んと座っているのは、私の友人であり同じ機関に所属している九龍
ナズナだった。ちなみにナズナは私と同等五位の子です。いや、ほ
んとはなんているの。

「聞いてません。私のサポートって、一人でも出来ると思うんだけ
ど……」

「アイナ様は放っておくことごとくズボラになりますから。私が
目を光らせておくわけです」

「ああー……、どうして私を自由に」

「するわけないでしょう。したらあつという間に自堕落生活まっし
ぐらの目に見えてますから。国の威信が掛かってるってのに……」

うう、わかってるわよ……。

まあ確かに、私も少しは自堕落になってしまふ気があるのは自覚
してるし、ゴミだし忘れたり掃除をうっかりし忘れたりお風呂にう
っかり入り忘れたりしちゃったりするけど！

「それがまずいんです。全く……、いいですかアイナ様、貴女はも
う少し一国の王女であると言う自覚を持ってですね……」

うわーん、誰か助けてえー！

時間は飛んで、オルコットさんがなにやら織斑一夏に喧嘩を売ったようです。

「実力からいけば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

いや、あなた何を言っているんだ。

ISはこの国の科学者が開発したのに、それ乗って開発国を島国呼ばわりって……、どうなのその辺。

「外交的にはとつてもまずい発言ですね。幾ら女尊男卑とはいえ、これはまずいでしょう。ログ取りました」

グッジョブ、ナズナ。

そして今だ続くオルコットさんの演説。面倒だなあ、確かランクAだっけ？

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

「ふむ……、一言よろしいですか？」

「なんですよ！？ 名乗りなさい！」

ヒーローものの悪役のような返し方ですね。私ああいうの好きな

んですよ。私たちって表立ってぶっ飛ばしたり出来ませんから、あ
あいうの憧れちゃいます。

なんて考えながら、ナズナは口を開いた。

「九龍ナズナ、エリシア国の代表候補生です。今貴女は自分が一番
強いとおっしゃりましたが……、少し図に乗りすぎではありません
か？」

「なんですって？」

「少なくとも貴女は私とアイナ様には勝てません。間違いない」

「なっ……！？　な、何を根拠にそのようなことを！　私を侮辱致
しますの！？」

あー、なんかナズナ切れてます？

ナズナは私の従者でもある。だから、まあ、切れちゃったのかな。
意外と忠誠心厚いし。自分の主を差し置いて何を言うか、みたいな
というか私含まれてますね。戦うの？

「侮辱……、まあ、事実をそのまま述べるのが侮辱であると言っ
たら、侮辱になってしまいますね」

「——ッ！　決闘ですわ！　その男も、貴女も、そしてアイナさ
んとやらも！」

「私まで含まれてしまったじゃない、ナズナ。面倒なんだけど」

「素直に捻り潰して差し上げてください。どうせ一〇秒持たないん
ですし」

「はあー、やる気でない……」

「クッキー焼きましょうか」

「よーしいつやりましょうか！　なんなら今からでもいいですよ！」

ナズナの焼くクッキーは絶品である。そしてナズナのお菓子作り
の腕は超一級。

つまり、とつとと終わらせれば最高級クッキーが近づくのです！
うふふ、これは勝つしかない。

「わ、私はクッキー如きにも劣ると言うのですか！？ 随分と舐めたことを言ってくれますわね……」

「……今、なんと言った」

「……は？」

「今なんと言ったかと聞いている」

「何を突然……」

「クッキー『如き』と言ったな？ クッキーを、私の好物をその程度のものだ？ ふん、貴様なぞその辺の石ころにも劣る砂利よな一〇秒もいらぬ、五秒でケリをつけてやろう。光栄に思え」

ああ、こいつ許せんわ。本当に許せない。

クッキーは至高の食べ物だ、知恵の味など比べ物にならないほどの。

噛んだ時のサクツとした食感、口に含んだときの蕩ける甘さ、そしてしつこくない風味……。全てにおいて食物の最高峰と云っていだらう。

そのクッキーを如きとは……。

「……もう許せませんわ。二度とISが使えないよう、叩き潰して差し上げますわ！」

「無駄だ。貴様は私に触れることすら出来ず墜ちる」

「ということで、アイナ様を推薦、私が自分で立候補致します」

「他にいないか？ ……よし、では各自来週、抽選にて対戦相手を発表する！ 以上！」

時は流れて私と砂利の戦闘。

IS『ソード・メイデン』を身に纏った私は、静かに開始の合図を待っていた。

『では、五秒のカウント終了と同時に開始とする。両者異論はないな』

「はい」

「ありませんわ」

私が地に足をつけているのに対して、砂利の『ブルー・ティアーズ』は宙に浮いている。まあ、この程度は一瞬で決まるか。では、恒例のあの言葉だけ準備しておこう。

『五、四、三、二、一……』

「寄らば、斬ります！」

——始めいッ！

直後、加速して相手の後ろへと回り込む。

ハイパーセンサーでこちらの動きは丸見えだろうが、まあそれでいい。これで勝った。

「寄りて斬ります——！」

「そこで——」

ブザーが鳴り、試合が終わる。

その音に、彼女は何が起きたのかすら分かっていない様子だった。

「な、なんですか？ 誤作動ですか、織斑先生？」

『いや、誤作動ではない。……お前の負けだ、オルコット』

「はっ？ わ、私はまだ一度もダメージを……、な、なんですか？
これは！？」

おそらく彼女が見ているのは、一瞬で残量がゼロになったシールドエネルギーの欄だろう。

私の『ソード・メイデン』の前に、数値は無意味。ただそこにあるだけで私は勝つ。この程度、遊びにすら使えないけれど。

「な、ありませんわ！？ どうしてシールドエネルギー残量がゼロに！？ あ、貴女、何か細工を——ッ！」

「していません。私は後ろに回りこみ様、斬りつけただけのこと。そして、それに気づけなかったのは一重に、貴女の力が及ばなかったから」

「え——」

言った直後、ライフルとビット六機が全て真つ二つに崩れ落ちる。さて、これで終わりか。味気ないな。

「な、な……！？」

「次に戦うときは、もう少し抗いなさい。遊びようがありません」
「遊びっ！？ 貴女、ISをなんだと！？」

「ただの玩具です。天才の作り出した、世界を弄ぶおもちゃ。それ以外に何があります？」

結局、ISはそこまでしか至れない。人の可能性の次の段階には、まだほとんどの人間が至れていないのだから。

「ああ、それと。貴女の心の平穏に少しでも協力してあげましょう」

ISを解除し、音声機能だけを残す。

「私はエリシア国家代表。よく覚えておきなさい」

さて、クツキーを食べるとしよう。お腹が空いてしまった。

キャラ紹介

アイナ・エリシアル・カノツサ 女 15歳

アイナ・E・カノツサ

普段はアイナ・エリシアルで通している、エリシア国王女。オリ主。

カノツサ機関に所属しており、創造主^{マスター}に忠誠を誓っている。創造主の指示でIS学園に入学することになる。カノツサ機関同

等五位。

聖剣『グラン・センチュリオ』に選ばれたものとしてその力を振るう。

心の暗黒面やそれによって生み出された現象、攻撃を弱体化、弱いときには無効化することが出来、天敵と言っている存在。最終段階になると振るうだけで次元が裂けるレベル。

モデルはユグドラ・ユニオンのユグドラ王女。別名外道王女。

九龍^{くりゅう}ナズナ 女 15歳

エリシア国王女であるアイナの親友にして専属メイド、そしてカノッサ機関同等五位。

暗黒面から生み出される現象を限定的に操ることの出来る能力を持つ。正しそれは自分の暗黒面だけ。

心の持ちようによってはアイナの能力を上回る、能力無効化といった現象も起こせるときがあるので、実質五分五分である。それ以上になると知覚外からの攻撃や、過去、未来、はたまた概念レベルでの攻撃が降ってくるので勝ち目なし。

モデルはなし。黒髪ショートカットで私服がメイド服、やや巨乳。

『ソード・メイデン』

アイナの専用機であり、金と緑、そして青の三色のコントラストによって彩られている。

武装は大剣型近距離兵装『グラン・センチュリオ』のみだが、エネルギーを刀身部分に纏わせ、一気に切り払うことで半月状のエネルギー体を飛ばすことが出来る。

単一技能は『レヴオリューション』、相手の誘導兵器、BT兵器などの全エネルギーを消失させる。

また、機体スペックが以上に高く、千冬ですら乗りこなせないじやじや馬レベル。普通の学生が使おうとすれば骨が逝く。
二次移行後に名称変更あり。

インフィニットストラトス 厨二病クロス！（後書き）

「ユグドラ・ユニオン体験版おもしろー」

「カノッサ機関、だしたいな……」

以上二つの案を纏めてぶち込んだ結果こうなった。どうしてこうなった。

厨二病能力は後々出てくるエターナルフォースブリザードとかが有名どころかな。

名前だけで採用するレベル。

例によって次回は 아닙니다。それよりもインデックスだ。どの辺を書こう、悩む。

あ、カノッサ機関は現実設定ほど黒くない、綺麗な組織となっています。現実に見るとね、皆目と心を抉り出して握り潰したくなるほどの毒素があるんだ。気をつけよう。

ちなみに、私は初めてまとめサイトを閲覧したとき、半分まで頑張った。もう無理、死んじゃう。他人の恥ずかしい過去見てるだけで辛いです。けど面白い。

とある魔術の禁書目録&超電磁砲 最強の無能力者（前書き）

前々から考えていた、湾内さんヒロインもの。

追記：主人公の高校を間違えていたので変更。

とある魔術の禁書目録&超電磁砲 最強の無能力者

スキルアウト。

武装無能力集団と書いてそう読むらしい。とすれば、きっと俺たちもその域に入っているのだろう。

「ボス!？」

「おう。何妙なことはねえか？」

「ええ、能力者同士の喧嘩があつたんで、鎮圧して警備員アンチスキルに引き渡した以外は特に！」

「そうか。怪我すんなよ？」

「ういっす！」

街中を見て回っている仲間に声を掛けてから商店街を抜ける。

俺の名前は秋村恒平あきむらひつへい。何の因果か『とある魔術の禁書目録』の世界に飛ばされ、あまつさえ元は高校生だというのに中学校からのやり直しを要求された。まあ、手探りながらも何とか高校生までを生き抜いてきた訳だが。

まあ、俺のことはまた後で話す機会があるだろう。それは置いておく。

今日は五月の一二日、高校二年にようやくたどり着いて一ヶ月とあったところだ。長かった、本当に長かった……！

中学校三年間は交友関係に気を使いつつ、ひたすら体を鍛えていた。今なら軟い鉄板くらいなら貫ける自信がある。

「……………てください！」

「ん？」

商店街を抜けてぶらぶら歩いていると、そんな声が聞こえた。高

めの女性の声のようで、どうにも不穏な空気が共にある。

気になったのでちょっと探してみれば、いたではないか。一人の少女に迫っている二人組の馬鹿どもが。

「やめてください、困りますっ!」

「困りますっ、だつてよ! ギャハハハ!」

「いーじゃんかよ! 痛くしねーからさ、お兄さんたちと遊ぼうぜえ?」

「ひっ!」

……どこまでも古典的な馬鹿どもだ。そして反吐が出る。

迫られている少女の制服はたしか、常盤台のものだな。こういう状況に慣れていないのも仕方ないか。まあ、知り合いにズガンズガン電撃ぶつ放して撃退できるような奴もいるが、あれは例外だ。自分でもお嬢様つて柄じゃないつつてたし。

つと、ともかく助けとくか。見て見ぬ振りは後味悪い。

「おいあんたら、やめとけよ。くつだらねえ真似してよお」

「ああ? んだとガキイ! 殺されてえのか!？」

「……はあ。俺の顔も結構広くなつたと思つてたんだが、まだまだ猫の額のごとき狭さだつたつて訳か。精進せねば」

「訳わかんねえこといつてんじゃねえ、よっ!」

二人組のうちの片方が、突然手から炎を飛ばしてくる。ああ、発パ火能力ね。レベルは3弱つてとこか。

即座に特殊警棒で打ち払い、接近して顎を打ち上げる。いい音したから、骨砕けたかもしれんね。

「なっ、デメエ!」

炎を掻き消されたばかりか、相方までもやられた焦りが怒りか、
ともかくもう片方の男もこちらへ手を翳す。その直後、男の周囲に
落ちていた瓦礫がこちらへと飛んできた。こっちは念動力^{テレキネシス}ね。

瓦礫も警棒を叩きつけて粉碎し、首と腹部に一撃ずつ入れる。ま
あこんなもんだろ。戦い方のたの字も知らん奴ならな。

「こんなもんか。嬢ちゃん、大丈夫か？」

「は、はいっ！　ありがとうございました！」

「気にすんなよ。しかし、なんで常盤台のお嬢様がこんなトコに
いたんだ？　ここは割りと治安が悪いんだがな」

「えっと、ちょっとお買い物に……」

「それで引つかかったってことか。気をつけねえと、またああいう
のが出るかもしれねえぞ」

なんだかふわふわした感じの子だな。見た感じ制服がまだ新品み
たいだし、新人生か？

「あんた、名前は？」

「わ、湾内絹保です」

「湾内さんね。俺は秋村恒平、よろしくな」

「あ、はい！」

……おい、ほんとに大丈夫かこの子。純粹すぎるぞ。

「んで、湾内さんはこれからどうするんだ？　もう六時近いけど」

「ええっと、少しアクセサリーを見たいと……」

「やっぱり、女の子ってそういうのに気を使うのか？」

「あつ、私のでなくて友人が誕生日なので、そのプレゼントにと思
いまして。学舎の園ではやはり見慣れてしまっていて……」

それでわざわざ外にまで出てきたところを、アレに引っかけたって訳か。こりゃ、少し周回きつくしとかねーとまじいな。

「アクセサリーか……。どんなのがいいんだ？」

「えっと……。出来れば細いネックレスのようなものが」

「細いネックレスね……。ちよつとまつてな」

「たしかこの近辺で人気のアクセサリーショップっていったら……。『みつかん光館』か『シヨップ ブランカ』くらいだな。

ただ、ブランカは学区の端の方にあるから行くのが面倒だな……。

「近くにあるのは光館だな。そっち行ってみるか」

「案内してくださるのですか？」

「またああいふバカに引つかかれても嫌だしな。光館の店主とは顔馴染みだし」

「そつなのですか？　ありがとうございます！」

……。本当にこの子は純粹すぎるなあ……。大丈夫なんだろうか。ともかく、湾内さんを連れて近くのアクセサリーショップへ移動。といつてもすぐそこだけど。

光館は結構和風な店で、アクセサリーも一つ一つ店主が丹精込めて作り上げた美しいものだ。俺もよく知り合いの誕生日とかに贈ったりするときにお世話になっている。

「まあ、なんて美しい……。！」

「ほれ、中に入らないと。とりあえず見て回ってみるか？」

「そうですね……。また案内をお願いしてもよろしいでしょうか？」

「そのつもり。つっても、この場合は聞いたほうが速いんだけどな。みつる光さん、いるかい？」

湾内さんと中にはいった俺は、カウンターの向こうへと声を掛ける。時間帯が時間帯なため、ほかに客の姿はなかった。

少し待つと、奥からゴソゴソという物音と共にエプロン姿の女性が出てくる。

「ん、いらっしゃ……、なんだあんたか」

「うははー、相変わらず愛想ねえ奴。今日は俺じゃなくてこっちな」
「……まさか、彼女か!？」

「ちげーよ! さっきバカに絡まれてるのを助けただけだ! あんたは俺のお袋か何かか!？」

一見すればとんでもなく若い、俺よりも年が若く見える二三歳の女性。それこそ細工職人の稲節光さんその人である。顔見知りというか、何故かよく弄られる。

まあいい人ではあるから、別に嫌ってわけじゃないけども。

「で、お嬢さん。アンタはどんな品をお望みだい？」

「あ、はい。私の友人の誕生日に、ネックレスを贈って差し上げたのですが、中々決まらなくて……」

「そのお友達つても常盤台の子かい？」

「はい」

「なら……」

少し話を聞いただけで、店の棚に並べられている商品から幾つかを見繕って手に取る光さん。すぐに戻ってきた彼女の手の平に乘せられていたのは、三本のネックレスだった。

どれもシンプルで宗教色のない可愛らしいデザインのようで、規則が厳しいと言われる常盤台でもこれくらいなら許されるだろうといったレベルのものだ。

「さ、好きなものを選ぶといい」

「それじゃあ……、これをお願い致します」

「分かった、包装もしておこう」

「あ、はい。ありがとうございます」

ペコリと頭を下げた湾内が選んだのは、丸い月を象って、中をくり貫いて円状にしたネックレス。ちゃんと小さなチェーンで繋がれていて、なんともおしゃれだった。

綺麗に包装された長細い箱を受け取った湾内は、こちらへ向き直る。

「秋村さん、ありがとうございました」

「いや、別にいいさ。それより――」

言葉が続けようとした刹那、通りを挟んだところから聞こえた爆発音。びりびりと大気を揺らすほどのそれは、一瞬で俺の意識を惹きつけた。

「ボス！ 向こうの通りで爆発っす！」

「事故か！？」

「パイロキネシスト発火能力者の喧嘩らしいです！」

「わかった、すぐにいく！ お前らはアンチスキル警備員に連絡しろ！」

「ういっす！ お気をつけて！」

店に駆け込んできたスキルアウトが頭を下げ、急いで駆け出していく。

さて、それじゃあ行きますかね。

なんて踏み出そうとした瞬間、ぎゅっと俺の服の裾を湾内さんに掴まれた。

「……えーっと」

「私もいかせてくださいませ。このお店を教えていただいたお礼です」

「いや、しかしだな」

「ハイドロハンド水流操作系レベル3、延焼を防ぐくらいならお手伝いできますから」

おいおい、随分と気の太いお嬢さんだな。ぽやぽやしてるが、根っこはしっかりしてるのか。……こりゃ、てこでも動きそうにないな。

……しゃーないか。

「わかった。ただし、ヤバイと感じたらすぐに逃げるんだぞ」

「はいっ！　ありがとうございます！」

ぱあっ、と笑って礼を言う湾内さん。おおう、可愛いじゃないですか。

自分で言うのもなんだが、女っ気のない人生だったからなあ……。羨ましいぜ。

「気をつけて行ってきな」

「おう、そっちもな」

「ありがとうございます、光さん」

俺は光さんへ軽く手を上げ、湾内さんはまた綺麗なお辞儀をしてから店を出て行く。

路地を進めば道は一本向こうだから直ぐに着いた、が。

「やりすぎだろ、こりゃ……」

「あ、あの方は、さっきの……！」

火を出していたのは、さっき湾内さんに絡んでいた男だった。もう片方は普通の学生のようにだったが、火が危なっかしくて近づいて取り押さえることも出来ないらしい。

「湾内さん、水を」

「は、はいっ」

手遅れにならないうちにと、湾内さんに周囲の水分を炎の回り、燃え盛る店の周囲に留めてもらう。なるほど、確かに水の膜があれば延焼はしないな。ってーか凄いな水流操作系。

「んじゃ、俺は、と」

「ちくしょう、テメエも俺をバカにすんのか！ ああ！？」

「な、何言ってるんだよあんたは！？」

おー、荒れてる荒れてる。……んー、あれ俺のせいかね。

「えーっと、これやったのアンタでいいんだよな？」

「ああ！？ …… テメエ、さっきのガキだな！？ 丁度いい、丸焼きにしてやるぜえ！」

「お、おい、逃げろあんた！」

こちらへ片手に向ける発火能力者と、俺に逃げると声を上げる男。どっちも高校生くらいだな。

なんて考えつつ、炎を特殊警棒で突破。にしても、よくこんな直ぐに戻ってきたな……。しばらく起きられないようにしたんだが、頑丈だなコイツ。

「ハハハハ！ 一発消したからって図に乗ってんじゃねえ！」
「何遍やっても、一緒だっつの！」

次から次へと発生する炎を特殊警棒で打ち払い、徐々に距離を詰めていく。と、次の瞬間、俺の頭上から嫌な音が。

咄嗟に顔を上へ向けると、炎を纏った鉄骨が俺目掛け降ってきていた。どうやら俺に炎をぶつけてくると同時にあれへもぶつけていたらしい。頭、使ってこれか。

「おら、潰れちまえ！」

「おおっ、こりやまずい、なっ！」

「がはっ！？」

一気に踏み込み、一撃で男の意識を沈めるとそのまま前へ跳ぶ。これでギリギリ鉄骨の範囲からは外れた。

「秋村さんっ！」

「おお、無事だ。湾内さん、そっちは大丈夫か？」

「は、はいっ！ よかった……！」

ほっとしたような声が向こう側から聞こえた。ああ、湾内さんの方からは俺が潰されたように見えたのかね。

まあ、ともかく。

この後は警備員が来て事態を収集してくれた。俺は危ないことをするなとちよつとばかり怒られたが、よくやったとお褒めの言葉も頂いた。湾内さんも同様で、後々学校の方で感謝状が出るらしい。

一応、俺はこんな生活を送っていた。

この湾内さんとの出会いを皮切りに、俺たちの世界が次々と変わっていくことも知らずに――。

これは、秋村恒平と湾内絹保の、長い長い戦いの歴史の、始まりのページである。

秋村 恒平 《あきむら こうへい》 17歳

学園都市の無能力者。とある高校の二年生。

第七学区を中心としたスキルアウト集団を統率しており、生身でスキルアウト100人以上を相手取って勝利した伝説もある。

ふとしたことから湾内と縁が出来、さまざまな事件を戦い抜いていくことに。

肉体は手加減した聖人とギリギリまともな勝負が出来る程度に強いが、人外の力がないため、その武器は技術と知能、そして組織力である。

浜面と共にアレイスターにイレギュラー認定される。

不良を率いてはいるものの、人が良く困っている人間は出来る限り

助けようとするものの、自分の限界を見極めて行動を起こすことも出来る。

戦いの中で己の戦闘力の低さに悩むようになり、その結果魔術を使えるよう修行を開始。簡単な魔術なら意地でダメージを抑え使用することが可能に。無茶苦茶であるが、魔術師と呼べるほどのものは使えない。

最終的には第三次世界大戦にも首を突っ込むことに。

湾内 絹保 《わんない きぬほ》 12歳

常盤台中学の一年生。

ふとしたことから恒平と行動を共にするようになり、徐々に恒平に惹かれていく。

水流操作系のレベル3だが、戦いの中でレベル5まで駆け上がっていく。

精神が強く、気力だけでキャパシティダウンの鳴り響く中立ち続けたことも。

精神は図太く、目上の人にも怯まない。学園都市に進入したアックアとの戦いで新しい「自分だけの現実」の獲得に成功、能力を独自のものに進化させる。

とある魔術の禁書目録&超電磁砲 最強の無能力者（後書き）

湾内さんかわいいよ湾内さん。

レールガンの中では一番好きかもしれん。一番が佐天さん。

脇役系の子を好きになる傾向あります、私。

これは、落ち着いたら連載したいなあ……。

インデックス憑依待機してる人、一応執筆はしてます！

ただ進まないだけで！ 気長にお待ちくださいませ。

感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2207u/>

くずみくんのネター一覧

2011年11月15日15時26分発行